

## ジェームズ・バラの日本伝道

横浜海岸教会 飛田 妙子

### 序に代えて・バラ一族の伝道

初代宣教師の一人とされるジェームズ・バラは、日本最初のプロテスタント教会である日本基督公会（現在の横浜海岸教会）を設立し、仮牧師として教会を育てる傍らS・R・ブラウンらと共に日本人教職者を養成する仕組みを作り、牧師辞任後は遠隔地の伝道に従事した。

最初の開拓伝道を行った名古屋では二女のアンナの夫となったR・E・マカルピンがアンナと共に宣教に努め、金城教会や金城女学校を設立した。その息子のJ・A・マカルピンは太平洋戦争の戦前から戦後にかけて精力的に活動し、人びとに慕われた。そのためジェームズ・バラは、その祖先として名古屋地方でよく研究されているようである。さらにアンナの娘とその夫のバウド・チャンバースとの間に生まれたラードナー・チャールズ・モアは大阪の淀川キリスト教病院のチャプレンを長年務めた。このようにバラ一族では宣教が子

や孫、曾孫にまで受け継がれ、多数の宣教師を輩出した。

### ジェームズ・バラの生い立ち

ジェームズ・ハミルトン・バラは1832年、ニューヨーク州の自営の農場に五男五女の二男として生まれた。母は特に信仰が深く、ジェームズはその影響を強く受けたようである。6歳のとき父親は友人の保証人になって農場を失い、以後転々と住まいを変えることになった。住み込みで働いていた16歳のころ、可愛がっていた主人の幼い娘の死に直面して死にたいほどの衝撃を受け、聖書全巻を読み通す。そして幼い頃の盗みなどを思い出し、罪の意識に苦しみ、信仰に目覚める。さらに啓示を受けて宣教師になる決心をしたとき、セントラル長老教会のフリーマン牧師に出会い、道が開けた。

父はニュージャージー州に農場を購入していたので、ジェームズは農作業をしながら受験勉強に励み、ラトガース大学に進学。ニューブランズウィック神学校に在学中日本が開国してS・R・

## 目次 兼 研究発表リスト (その48)

第447回 2023年10月21日

ジェームズ・バラの日本伝道 ..... 飛田 妙子 ..... 1

第448回 2023年11月11日

明治16年のリバイバル運動と横浜 横浜伝道会社と阿久和教会 ..... 山口 陽 一 ..... 3

第449回 2023年12月16日

横浜クライストチャーチ史 ..... 民谷 雅美 ..... 5

横浜海岸教会150年史編纂に関わって ..... 岡部 一興 ..... 8

松下孝さんを偲ぶ ..... 岡部 一興 ..... 11

編集後記 ..... 花島 光男 ..... 12

ブラウンが講演に訪れ、日本宣教を意識する。学校を卒業した1860年の暮、ブラウンと共に来日したシモンズが辞任したため、急遽ジェームズの日本派遣が決まった。

1861年の新年早々ヴァージニアの叔母に挨拶に行くと、遠い親戚のマーガレット・テート・キニアを紹介されて5月に当地の教会で結婚式を挙げる。ちょうどひと月前に南北戦争が始まって大混雑の中を帰宅し、6月1日、キャセイ号でニューヨークを出港。ジェームズは29歳、マーガレットは21歳だった。11月11日に横浜に到着し、ヘボンとブラウンの住む成仏寺に迎えられた。

### 禁教の日本で

バラ夫妻の日本語教師は鍼灸医の矢野元隆で、ジェームズは矢野と共に「ヨハネ伝」の翻訳に取り組んだ。結核を患う矢野にとっては自身の魂の救済にもなり、受洗を決意するに至る。バラはヘボン立ち合いのもとに最初の洗礼式を行った。

1864年1月、幕府から教会用として居留地167番の土地（現・横浜海岸教会の敷地）が与えられた。それより前、宣教師らは幕府の要請で横浜居留地に移転、バラは領事館の一部を住まいとしたが1866年の横浜大火で領事館は全焼し、バラは一切を失う。一方ブラウンは翌年の火災で聖書の翻訳原稿の多くを失い、一時帰国する。その後教会の土地を守るためバラはゴープルに小会堂の建築を頼み、1868年12月末、完成を見て一時帰国。

本国でバラは日本人の教会のための3000ドルの募金を達成。またWUMS（米国婦人一致外国伝道協会）のミセス・プラインを訪ね、横浜で発生した混血児の救済と日本女性の教育のために女性宣教師の派遣を要請した。

バラは家族と共に1870年11月に日本に戻り、翌年春小会堂で「バラ塾」を開く。主に武家の子弟だった以前の生徒が数十名集まった。帰国中ゴープルの手で山手48番に完成した自宅は賃貸中で、同じく新築のゴープル宅を借りた。

6月、WUMSの女性宣教師プライン、クロスビー、ピアソンが来日し、バラは折よく空いた自宅を提供。プラインらは8月にバラ邸で「ミッション・ホーム」（現・横浜共立学園）を開設。

1871年11月28～12月5日、ゴープル対バラの領事裁判が行われた。「小会堂とバラの自宅の建築と管理の費用」及び「バラ帰日後のゴープル宅の賃借料」などについてゴープルが提訴したもの。バラは敗訴、賠償金143ドルを払う。バラはショックで疲労困憊する。

### 日本基督公会の設立

1872年2月10日（旧暦1月2日）小会堂で初週祈禱会が始められた。バラがペンテコステの説教に続いて短く祈ると、それまで自分から祈ったことのない青年たちが、次々と激しく祈りだした。祈禱会はその後毎日、数週間続く。

主日礼拝の3月10日、9名が受洗し、すでに受洗していた小川義綏と仁村守三を加え、11名で「日本基督公会」が設立された。教派によらない日本人の教会を目標とした。長老は小川義綏。驚くことに、礼拝には3名の諜者（スパイ）が出席していた。先輩格の仁村守三、受洗した安藤劉太郎、会衆の桃江正吉である。この日ヘボン夫妻は上海に滞在中、タムソンは一時帰国中だった。その後バラは健康を害して弟のジョンを呼ぶ。米国長老派教会のジョン・バラは6月に来日して高島学校を引き受け、後にバラ学校校長となる。

翌1873年9月20日、東京日本基督公会（後の新栄教会）が設立された。仮牧師は米国長老派教会のタムソン、長老は小川義綏、会員8名のほとんどが横浜公会の会員。2月には切支丹禁制の高札が撤去されていたので、長老の小川と会員の奥野昌綱は早くも10月の末、武相地方に20日間にわたる日本人最初の地方伝道を行っている。

しかし東京公会の帰属に関して教派の問題が起こった。ヘボンやルーミスは長老派の教会と認識したのである。そして1874年9月13日、横浜第一長老教会（指路教会の前身）が、ヘンリー・ルーミスを仮牧師としてヘボン施療所で設立された。

1875年7月10日、居留地167番に横浜基督公会の新会堂が完成した。横浜ユニオン教会と共用で、主日礼拝は午前がユニオン教会、午後が横浜公会だった。

その夏バラは伊藤藤吉と箱根山中宿で伝道集会を開き、多くの受洗者を得た。その後三島大社前

で路傍説教を始めたところ投石事件が起き、町の有力者小出市兵衛にかくまわれた。

1876年10月8日、ミラー夫妻やバラの伝道により、会員32名で上田公会が設立された。当日バラから19名が受洗し、長老に稲垣信が選ばれた。

日本人教職者の養成が急務であったため、バラとブラウンは長老派教会とスコットランド一致長老教会に働きかけて、1876年4月に日本基督一致教会を創立した。1877年6月の中会では小川義綏、奥野昌綱、戸田忠厚の3名が伝道師試験に合格。10月の中会で按手礼を受け、日本人最初の牧師となった。奥野は早くも翌月の11月3日、会員18名で麴町教会を設立した。メンバーには海岸教会の会員が多く、人材が流出した海岸教会は稲垣の応援を求めた。稲垣は1878年4月の中会で試験を受け、その後伊藤藤吉、植村正久らと准允の試験に合格したと記録されている。1877年10月、東京築地に東京一致神学校が創設された。

### 稲垣信、初代牧師となる

1879年4月、稲垣信は海岸教会第一代牧師に就任した。バラは仮牧師を辞任し、自宅を改装して神学校予備校となる「先志学校」を開校した。

1880年、バラは中山道を通り、下諏訪宿まで宣教。上諏訪に講義所ができた。さらに諏訪から伊那、飯田、馬籠宿、中津川を経て瀬戸、名古屋まで伝道に歩く。当時バラは野宿を覚悟で雨傘と大きな麻袋と細引きを持ち歩き、木に吊された形で雨露をしのいだという。こうして節約した交通費は地方教会（瀬戸永泉教会）の敷地の購入にあてられた。仏教が盛んな名古屋は困難が多かったが受洗者は少しずつ増え、最後は阪野嘉一が受け継いで、1884年に28名で名古屋教会が設立され、阪野は初代牧師となった。

1883（明治16）年、横浜の初週祈祷会からリバイバルの機運が起こった。発端はバラが見た不思議な夢の告白という。リバイバルは東京に飛び火し、やがて全国に波及した。1月4日、三島の騒動でバラをかくまった小出市兵衛ほか数名がバラから受洗して三島教会が設立され、海岸教会に入籍していた約70名が転出した。横浜の近隣地方の

伝道も活発化し、横須賀、阿久和、戸塚、鶴間、原町田、金目村、保土ヶ谷などに伝道所ができた。

1885年春、バラは米国南長老派教会の伝道委員会に宣教師の派遣を要請。12月にR・B・グリナンとR・E・マカルピンが横浜に到着し、高知に赴任した。バラも高知に応援に出かけ、その後も何度か土佐地方に宣教に行き、毎回大勢の洗礼志願者を得たという。

マカルピンはその間にバラの二女のアンナと結ばれて1887年10月に海岸教会で結婚式を挙げ、バラの名古屋伝道を受け継いだ。

病気がちだったマーガレット夫人は1909年に横浜で没したが、ジェームズは1919年に帰国するまで58年間伝道を続けた。バラ塾の生徒の記録によると、バラには生来の強い宗教的雰囲気と、スケールの大きな人間愛があり、生徒たちのために熱誠をこめて語り祈る姿にみな感動したという。日本語は拙かったが、初期の宣教者にはかけがえのない存在だったといえよう。



## 明治16年のリバイバルと横浜 ～横浜伝道会社と阿久和教会～

東京基督教大学 山口 陽一

阿久和教会は、1890年9月17日、神奈川県鎌倉郡中川村阿久和（現横浜市緑区新橋町）の中丸定右衛門家において、日本基督一致教会の教会として設立された。日本基督一致教会はこの年の大会で日本基督教会となる。明治16年のリバイバルの一つの結実である。

### 1、明治16年のリバイバルと横浜伝道会社

明治16（1883）年のリバイバルから横浜海岸教会の受洗者が急増する。1882年には14名だったが、83年には83名となり、以後89年まで39名、60名、145名、142名、126名、112名と推移する。ここには阿久和をはじめ周辺地域の受洗者が含まれていた。リバイバルの中、横浜海岸教会は総会で「横浜伝道会社」を設立する。「明治十六年三月総会ノ決議ニ基キ横浜伝道会社ヲ設立シ、本港所ニ

講義場ヲ開キ且近在地方ノ伝道ヲ始ム 伝道地ノ重ナル所ハ横須賀、阿久和、戸塚、鶴間、原町田、金目村、保土ヶ谷等ナリ 右伝道会社ヨリ佐ノ諸氏ニ委嘱シテ時々出張伝道セシム稲垣信、熊野雄七、山本秀煌、藤生金六、伊藤々吉、星野又吉、多田晋、林霧、原沢紀堂、岡山省三郎等外教名」

横浜海岸教会の資料「綴込（林霧）」に「横浜伝道会社規則」があり、そこには伝道会社の趣旨が「此会ハ世ノ同胞兄弟ヲ基督ノ福音ニ導ンガ為ニ各所ニ伝道者ヲ派遣シ及ビ伝道師志願者ヲ養成スル」と記されている。伝道地は東海道の宿場であった保土ヶ谷、平塚の北の金目、三浦半島の横須賀、戸塚から北に阿久和、鶴間、原町田である。『横須賀日本基督教会五十年史』（1935年）によれば、横須賀教会の建設式は1886年7月15日である。同書によると1885年に横須賀に派遣されたのは、伊藤藤吉とジェームズ・バラ、熊野雄七、山本秀煌、原沢紀堂、稲垣信、和田秀豊、田中貫一等であり、横浜伝道会社の関与が窺える。「日本基督一致 海岸教会々員名簿」（明治21年）には、横浜伝道会社委員として、熊野雄七、林霧、岩間巳之助、鈴木新吉とあり、海岸教会の長老が入れ代わり委員となっている。

## 2、阿久和教会の萌芽から独立、解散とその後

阿久和では、1885年3月22日、名主の中丸定右衛門（39歳）とその子鶴吉（20）ら三人が海岸教会において稲垣信（37）から受洗した。大橋俊雄はこの間の事情を「定右衛門の次子で横浜に出ていた鈴木彦太郎の導きによって、父定右衛門・兄鶴吉が稲垣信牧師から受洗」としている。続いて定右衛門の父、阿久和の素封家の北井要太郎（25）、定右衛門の二男の彦太郎（16）ほか4名が受洗する。すべて男性で、まず家長が受洗し、子や親が続いている。農村地域における入信の典型であり、中丸伝右衛門と北井要太郎の家族、大岡幸三郎（18）、大岡喜十郎（39）らが受洗した。中丸定右衛門の妻さきと長男鶴吉の妻たいは大岡家（現長屋門公園）から嫁いでおり、大岡幸三郎はその長男である。

「海岸教会沿革ノ要畧」によると、1886年に「伝道地ニテ久カラズシテ教会設立ノ望アル所」とし

て「戸塚、阿久和、鶴間、及ヒ其近在、金目」とある。戸塚矢部町には、1886年5月には海岸教会のバラと稲垣信が伝道し、7月に山埜井久左衛門が稲垣から洗礼を受け、1890年8月、山埜井久左衛門の出資で矢部町十番地に基督教講義所が設立された。これもまた当時の典型である。しかし、矢部基督教講義所は1908年3月に廃止され、講義所の建物も関東大震災で倒壊した。

金目村では1886年10月、宮田寅治（32歳）、猪俣道之輔（31）、猪俣要之助（22）、猪俣弥八（14）、水島鐸四郎（32）の5人が横浜海岸教会で稲垣信から受洗した。宮田は自由民権運動家の県会議員である。姓は猪俣13人、宮田9人、臼井4人、水島、森、秋山、という同族教会で、1888年には金目川のほとりに金目日本基督教会の会堂が建設された。

阿久和では、1890年9月、会員は66名（男性32、女性19、子ども15）、求洗者22名、「月会」は平均45人（男性25、女性10、未信者2）、献金12円、教会費14円となり、信徒の連名で東京第一中会に教会設立願書を提出、9月17日に許可が下り教会が設立された。牧師は横浜海岸教会の稲垣信が兼任した。「月会」や、設立願書の「主の日不問聖礼典を施行」から、礼拝は月一度であったと思われる。

中丸定右衛門家の長屋門を入り、左奥の蔵が教会に使用された（現在は撤去）。北井要太郎家は大岡家の向かいに、1891年2月、地域最大の製糸場である改良合名会社を設立し、中丸定右衛門も出資している。蒸気機関を用い1896年から1905年頃のまでの最盛期には工女が200名に達した。大岡家では1894年3月に大岡製糸大剛社を設立（現長屋門公園）した。繁栄した界隈は「江戸阿久和」と称されたという。

阿久和教会の13家族の姓は中丸、北井、大岡、森、相沢、浅尾、八ツ橋の7つで、3分の2は中丸、北井（地域に多い姓は相原、相沢、横山）、職業は農家（兼商業）である。個人は彫刻師、小学教員、薬局生、医師、医学生などの9人。男女比は2:1である。但し、教会設立後の受洗者は、それぞれの家族から7名のみであった。

中丸家に現在も伝わる木彫りの額には「愛」「世

の中に敵はあるまへこの一字」と彫刻してあり、26歳で受洗し教会存続中の1892年に34歳で亡くなった彫刻師小川経吉（経信）の銘がある。中丸家は明治中期に製糸業から百合根輸出に転じており、古い白百合の油絵も残されている。作者のイニシャルは「S.H.」。横浜伝道会社の委員で、フェリスや共立女学校で書画を教えた林蕪だろうか。林は工部美術学校出身で、東京藝術大学美術館には林蕪の百合のレリーフ「草花文様」1878年・コンテ、「風景」1880年・鉛筆が所蔵されている。

阿久和教会が存在したのは1890年9月から1898年7月までの8年であるが、85年から海岸教会に属し、解散以後も横浜海岸教会の伝道所として継続された。『横浜海岸教会総会記録 明治三十年三月起 至三十八年十二月』には、明治30年3月28日（日）の総会記録があり、1897年の総会で阿久和教会への補助が満期終了した。これを受けて阿久和教会は解散し、中丸定右衛門・さき、鶴吉・たい、よき、定三、つま、道三郎、鈴木彦太郎・たよ、森松五郎の11名は10月16日に海岸教会に転入した。

ところが、1904年1月23日の海岸教会「定期総会記録」には「阿久和金目等も近来大いに新興の方なり、殊に頃日阿久和に於ては連夜の幻燈演説会を開きしに連夜共に聴衆満場立錫の余地なく意外の好況なりし此機を逸せずして伝道を試みまし」とある。1906年の『福音新報』にも、阿久和教会の再興の兆しが「或は早天祈祷会、或は連朝祈祷会、是れ何事かの前徴ならずんばあらず」と伝えられている。

中川村村長の千葉胤<sup>たねよし</sup>禄は、1908年4月29日に受洗、5月11日に53歳で召天した。中丸鶴吉他7人が発起人となり、北井要太郎ら17名の篤志者と11名の村会議員の寄付により中丸家の墓所に設けられた墓には、「君曾信基督教全号四十一年四月二十九日受洗」と刻まれている。「曾て基督教を信ず」とあることから、すでに信仰があり死に臨んで受洗したものと思われる。当時の海岸教会の牧師は笹倉弥吉であり、『福音新報』が記した教会再興の結実と言えらる。その後の詳細は記録がなく不明である。

『横浜海岸教会一五〇年史』が記すように、「明治16年以降のリバイバルによる受洗者の増加を考えると、横浜伝道会社が伝道の発展に果たした役割は小さくない」。その受洗者の中に阿久和教会の信徒たちがいた。一方、横浜伝道会社から巣立った伝道者たちは各地で伝道牧会を続けた。これも横浜伝道会社の成果である。

---

## 横浜クライスト・チャーチ史 1860-2023

民谷 雅美

### 初代教会堂建立と政府補助金

横浜クライスト・チャーチは1863年10月横浜居留地に建てられたイギリス国教会の教会である。当時英法にはジョージIV87章があり、外国で英国人聖公会信徒団が教会堂を建てるときその建築費の半額と、年間教会運営費の半額とを政府が補助した。牧師にはベイリー司祭が領事館付牧師に任命され1862年7月に家族と共に横浜に着いた。

幕末期外国人殺傷事件が頻発、攘夷派による横浜居留地襲撃の噂が流れ、英仏両国は居留地防衛を名目に自国軍隊を山手に駐屯させることを幕府に認めさせる。英国外務省はクライスト・チャーチ教会堂とベイリー司祭の礼拝奉仕に駐屯軍のための宗教的な機能を担わせた。

1870年クラレンドン外相は信徒団に駐屯軍が撤退し政府補助金が中止されても、教会堂を維持できるように財政基盤を強くするように勧告する。信徒団は\$2000を借金して側廊を増築し、座席数を増やし座席専用使用料の増収を図るが、増収に失敗する。更に信徒団は日本初のパイプオルガンを\$4000で購入し、残金\$1600を負う。外務省は1872年、1873年、1874年分の政府補助金をそれぞれ£400支給することで、信徒団を借金から解放すると共に、1874年分をもって補助金の支給を中止する。

政府から経済的に自立した信徒団は新態勢を構築する。要点は①理事4名による運営、②1座席当たり年間\$20の座席専用使用料の支払い義務、③教会の土地と建物の信徒団と英国政府から理事への移譲、④理事は死亡または日本出国以外は終

生とする。

新態勢後信徒団財政は厳しい時期が続くが、1888年には健全化し、1890年以降は余裕が出るようになる上、婦人信徒が毎年イベントを開催しその収益を教会に献金する。

1875年ギャラット司祭が英国から招聘され、1880年まで牧師を務める。同司祭はクライスト・チャーチ内で日本人にキリスト教を宣教し、その後の横浜聖アンデレ教会の芽を育てる。後任牧師はハンツのアーウィン司祭が招かれ、21年間牧師を続ける。

## 2代目教会堂建立

1897年サトウ公使が1万円余の多額を寄付することで新教会堂建立の機運が高まる。著名な英国人建築家コンドルが検査して既存の教会堂は使用することが危険と判明、信徒団は2代目教会堂建立に動く。代替礼拝場所に山手のパブリック・ホールを確保。高価格の旧教会堂と旧牧師館の土地を売り、低価格の山手235番の土地を買い、土地売買差益¥15,000を得る。1899年座席専用使用者会議でコンドル設計の煉瓦造りの380席の新教会堂を予算¥52,000で建てると議決する。1901年6月オードレー主教が聖別式を行う。建築費総額¥51,538。借入金残高¥2,078は1905年までに返済する。2代目教会堂は長さ86フィート、幅45フィート、屋根はスレート葺き、四角い鐘楼が特徴の、軽量鉄鋼の骨組みが壁にはめ込まれたビクトリア様式の建物である。

1902年フィールド司祭が夫人と共に着任。

1875年ダービー外相は日本に係る主教管轄権をロンドン主教からビクトリア（香港）主教に移す。バードン香港主教は日本への英国主教の派遣を求め、1883年在日英国伝道主教にプール主教が聖別されるが病気で帰国。1886年ピカステス主教が後任主教に聖別され、1897年まで11年間日本人宣教に力を注ぐ。後任には大阪地方主教のオードレー主教が就任する。

## 山手での教会活動

ガバナンス問題。1875年新態勢発足以来理事と委員会メンバーについて曖昧な点があった。委員会はこれを明確にするため、1903年分教会会議に委員会提案を提出するが、意見がまとまらず議長

は議論を留保する。その後の詳細は不明だが事実として、1904年以降委員会は4人の理事と毎年の教会会議で選出される5人の合計9人で構成される。

分派問題。1904年分教会会議ではフィールド司祭との3年契約の更新が議決される。この議決を得るために、委員会は造反者派を排除し、高教会派に圧力をかける必要があった。

1906年分教会会議ではジェームズ理事が、フィールド司祭夫妻に6カ月の英国旅行と¥5000を支給することを提案し可決される。

クライスト・チャーチ奉仕会。フィールド司祭が主導する信徒による奉仕団体である。会員数94名、7部会があり、殆どの信徒がどこかの部会に属している。

パリッシュ・ルーム。1912年教会經理の枠外で¥5000の寄付金を集めて建築する。

1911年ウェストン司祭が牧師に就任し、1915年ストロング司祭がその任を継続する。

## 関東大震災と3代目教会堂建立

1918年第1次世界大戦が終わると横浜に外国人が戻り、クライスト・チャーチには活気が蘇る。1922年ヘーズレット司祭が主教に就任。

1923年9月1日関東大震災が起こる。クライスト・チャーチは教会堂、牧師館、パリッシュ・ルーム、パイプオルガンを失う。ストロング司祭は山手で外国人住民を火災や瓦礫から救出する。米国から送られた一対の簡易木造建築が仮礼拝堂と仮牧師館に建て直され、3代目教会堂が建立されるまで使われる。

1927年バックニル司祭が来日し、牧師に就任、信徒をリードして、世界大恐慌の逆風のなか、3代目教会堂建立のため力を尽くす。1931年5月ヘーズレット主教の司式で3代目教会堂が聖別される。新教会堂は英国風城砦を連想させる塔を持つ、鉄筋コンクリート造り、屋根はスレート葺き、外壁に大谷石が張り付けた建物である。設計は米国人建築家モーガンである。

## 太平洋戦争

1941年12月8日太平洋戦争が勃発。その日ヘーズレット主教は特高警察に逮捕され、4か月間横浜刑務所で拘禁され、翌年捕虜交換船で帰国する。

クライスト・チャーチの所有する土地と建物は関東財務局に接收される。

横浜に抑留された英国人の希望を叶えて日本政府がイースター礼拝を許可する。1942年抑留者90人は3代目教会堂でシモンズ司祭の司式で復活日の聖餐式を祝う。

1945年須貝主教はスパイ容疑で逮捕され3か月間巢鴨拘置所で拘禁される。

1945年5月横浜大空襲。教会堂は屋根が焼け落ち、建物内部は焼失し、外壁と鉄骨だけとなる。建物が鉄筋コンクリート造りであったのでホール、塔屋、地下室は焼失を免れ大空襲の罹災者の避難場所となった。

### 戦後のクライスト・チャーチ

1945年8月15日太平洋戦争終戦。日本は無条件降伏し、敗戦後の日本を連合国軍が占領統治する。

1946年オーバートン米国副領事が来日中のヘーズレット主教と須貝主教の同意を得て、連合国最高司令官に、クライスト・チャーチ再開、日本人会衆の礼拝参加、日本政府による教会堂再建を提案する。この提案で日本政府による教会堂の修復は進む。須貝主教は岩井司祭をクライスト・チャーチの管理司祭に任命、同司祭は家族と共に牧師館に住み礼拝を守る。

1947年3月日本人会衆「横浜山手聖公会」が誕生、岩井司祭が牧師に就任する。戦後初のイースター礼拝が須貝主教の司式で行われる。教会堂の再聖別式が前川主教の司式で行われ、小聖堂がヘーズレット/須貝両主教の記念聖堂として奉獻される。

戦後礼拝は米軍牧師と米軍信徒が中心に行われ、1949年クライスト・チャーチはマイズ米軍牧師名で南東京教区の教会になることを願い、前川主教は認める。しかし1950年頃から英国人信徒が増え、英国人牧師を求める声が広がる。他方米軍の駐留が長引き、日本経済の復興が遅れ、英国人牧師の横浜派遣は難しくなる。最後は1954年ロンドンのミッション・トゥ・シーメン本部が、ヘルフト司祭の横浜派遣を決断する。ヘルフト司祭は2年間クライスト・チャーチの牧師とミッション・トゥ・シーメンのチャプレンの任を果たす。その後キャッソン司祭が8年間その任を継続する。

1959年フィッシャー・カンタベリー大主教が日本聖公会宣教100年を記念して来日し、これを機にクライスト・チャーチを訪問する。

1960年2月クライスト・チャーチと南東京教区との間に合意が成立する。内容は①1941年信託譲渡契約書は終結される②土地と建物は南東京教区からクライスト・チャーチに返還される③クライスト・チャーチは宗教法人となり土地と建物を登記する。

1962年クライスト・チャーチは創立100周年記念礼拝を、八代日本聖公会総裁主教の説教、野瀬主教の司式で捧げる。キャッソン司祭は教会100年の歩みを記す著書を発表する。

1968年バーク司祭が横浜の牧師とチャプレンの任に就き、36年間務め、2004年帰英する。

1973年教会敷地内に鉄筋コンクリート造り2階建ての牧師館が建築される。

1970年代横浜の英米人社会の規模が縮小する。変化の波はクライスト・チャーチにも押し寄せる。長年教会活動を支えてきた主要信徒が減り、礼拝を守り続けてきた信徒の高齢化が進む。教会が所有する土地と建物の維持管理が難しくなる。1978年9月クライスト・チャーチは所有する土地と建物を横浜教区に譲渡し、宗教法人格を解散し、横浜教区と合併する意志を表明し、必要な手続きが実施される。

1990年教会堂は「横浜市認定歴史的建造物」に認定される。1993年、1995年、1997年教会堂と関連施設に工事が行われる。工事費の内6千5百万円は横浜市からの補助金で賄われ、残額は両教会の信徒の寄付金で支払われる。

2005年1月教会堂で大火災が発生する。教会堂は火と煙に包まれ屋根が抜け落ちる。若い米国男性による放火だった。両教会の信徒は心一つにして復興資金の獲得に努力し、11月に復興感謝礼拝を捧げることができる。

2007年2月マディー司祭が横浜の牧師とチャプレンとして赴任する。2011年3月東日本大震災が発生し、大津波が東京電力第1福島発電所を破壊し、大量の放射能が空中に放出される。放射能事故の影響を心配したシーメン本部はマディー司祭を英国に帰国させる。

マディー司祭の帰国後クライスト・チャーチは、米国聖公会の退職司祭エヴァンス司祭の招聘に成功する。教会は同司祭夫妻に牧師館を提供し、同司祭は2011年12月から9か月間主日礼拝を司式する。

2012年8月英国からデンジャーフィールド司祭が来日し、横浜の牧師とミッション・トゥ・シーフェアラーズのチャプレンの任に就き、多くの実績を残して2018年5月ヨルダンへ移る。

2014年9月クライスト・チャーチは創立150周年記念礼拝を英日合同で植松日本聖公会首座主教を説教者に招き、三鍋主教の司式で行う。

2018年9月横浜山手聖公会の入江司祭が横浜教区主教に選任され、後任に竹内司祭が就任。

2020年12月デンジャーフィールド司祭が再度横浜の牧師とチャプレンに任命され、新型コロナウイルス感染症の嵐の中に任務を始める。

2020年新型コロナウイルス感染症が世界中で流行し、日本でも多くの患者が出る。入江主教は20通を超える主教メッセージを出し感染防止を呼びかけるが、コロナの勢いは収まらない。主教は主日礼拝の公開中止を各教会に指示する。これは信徒が主日に教会へ行かず各自の場所で礼拝を捧げるもので異例のことである。これは教会から感染者を出さないとする主教の決意の表明である。この3年間クライスト・チャーチの活動はコロナのために制約を余儀なくされた。しかし2023年々央になって主日礼拝出席者数は、コロナ以前に戻っている。コロナを警戒しつつも、クライスト・チャーチはデンジャーフィールド司祭を先頭に新たに教会活動を始めている。

---

## 『横浜海岸教会150年史』の編纂に関わって(3)

岡部 一興

### 宗教法案

今回は、第IV篇の箇所、関東大震災と教会の復興まで記した。日本基督教会を中心として、ここで宗教法案に対する戦いを記したいと考える。1899(明治32)年宗教法案が、第二次山県有朋内

閣の時、貴族院に提出されたが反対にあって成立しなかった。1926(大正14)年5月若槻内閣の時、宗教制度調査会を設置し再び帝国議会に提出された。宗教法案反対基督教同志会会長の山本秀煌がこの法案の問題を問い質した。監督官庁が宗教の教義の宣布、儀式の執行、行事に関して安寧秩序を妨げた場合は、文部大臣は寺院や教会の取り消しができるとした法案を考えていた。これに対し、反対運動が功を奏して審議未了となった。

さらに、1929年2月15日、再び宗教法案提出。同年1月29日宗教団体法案基督教信徒大会を青山会館において開催、会衆は2000名に上る盛り上がりを見せた。会の代表者は文部大臣や首相に直接会って陳情した。笹倉牧師も実行委員として働き、首相や文相宅などを7台の自動車をつなげて陳情。29年3月24日終に廃案となった。しかし、昭和10年代になると、日本はファシズムへの道を辿り信教の自由が踏みにじられていく。36年には宗教団体法に対し、「宗教制度調査会」を立ち上げたものの、明確に反対の立場を取ることがなくなって行った。富田満の主張に表れているように、修正して認めるという消極的立場に変わっていった。1939年1月、平沼騏内閣のとき宗教団体法を提出、翌年4月には実施されていった。

### 神の国運動

第一次世界大戦後、1918年から20年にかけてスペイン・インフルエンザ(スペイン風邪)が世界を襲った。速水融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』によれば、5000万人の死者、日本でも45万人が亡くなった。1918年3月4日第一次世界大戦に参戦するアメリカカンザス州ファントン基地の兵士48名が発熱、頭痛を訴えて死亡。同年5月から6月にかけて約800万人が感染。従来の年史やキリスト教史においては、スペイン・インフルエンザについては、ほとんど触れられない。最近その反省からこの問題がクローズアップされてきた。横浜海岸教会所蔵の資料を調べたが、スペイン風邪の影響を資料的な不足もあって見出すことができなかった。日本のキリスト教会においても、インフルエンザに感染し死亡する例があるが、ほとんどの教会ではその対策や予防を考えて



いないことが指摘できる。

1920年代の日本は、デモクラシーの思想が浸透したが、1930年代は満州事変を契機にファシズムへと転換。18年の米騒動、20年3月には戦後恐慌、22年金融恐慌、23年関東大震災、29年世界恐慌が始まり深刻な不況が続いた。そうした社会状況の中で、キリスト者が社会問題に対し貴重な発言をしているのを散見できる。その一つが神の国運動である。1928年、エルサレムにおいて世界宣教会大会が開かれた。1929年国際宣教会協議会会長J.R.モットが来日、日本基督教連盟主催で鎌倉と奈良において特別協議会が開かれた。そこで、賀川豊彦が「神の国運動」を提案した。

日本基督教連盟では、神の国運動中央委員会委員長に賀川と神戸神学校の同僚であった富田満を選び、1930年1月から3ヶ年計画で実施、運動はさらに2年間延長され、5年に及んだ。組織的には、中央委員長・富田、副委員長には組合教会の小崎弘道、幹事には日本基督教連盟幹事の海老澤亮、アキスリング、総務部主任には富田、伝道部小崎、教育部金井為一郎、宣伝部には聖公会の村尾昇一、社会部は小林誠、農村伝道部は眞鍋頼一を主任として超教派的なものとした。横浜における神の国運動については、30年1月、神の国運動横浜地方委員会が「横浜神の国運動宣言文」を出し、指路教会や海岸教会で、大祈祷会が行われた。

神の国運動には、貧しい者、抑圧された者を隣人として迎い入れるという側面があった。その訴えは、「社会信条」を掲げ個人の魂の救済に留まらず社会問題との関わりを明らかにして、第一次世界大戦後に山積していた労働運動、農民運動、普通選挙運動等の問題を教会の中に取り込み、福音の社会化を図ろうというものだった。全国に93に上る地方委員会を組織、100万人に及ぶ参加者を見た点では、大きな成果が見られた。神の国運動が開始されてから1年間だけで、635の集会、聴衆27万人、信仰決心者1万3485人の成果を上げた。しかし、1931年に満州事変が勃発、国内では1932年2月から3月にかけて政財界の要人が多数標的となった血盟団事件が起こり、井上準之助、團琢磨が暗殺された。さらに36年には、2.26事件、5.15事件が起こり、日本は戦時体制へと向かい、

神の国運動はそのような状況のなかで終息せざるを得なかった。

### 非常時体制と海岸教会

1937（昭和12）年7月7日、日本軍は北京郊外盧溝橋において夜間演習をし、中国軍から不法な攻撃を受けたと言いがかりをつけ、中国軍に戦争を仕掛けたのが「支那事変」である。日本は、陸軍全兵力の3分の2にあたる16師団を投入、上海、杭州、南京を占領した。南京城に入るにあたり10数万人の中国人を虐殺、しかし中国はひるむことなく国民政府が武漢に移って抗戦、広大な中国を占領するのは難しく長期戦になった。日本は、38年に国家総動員法を成立させて、政府は国民の財産、身体も思うままに動かせる権限を握り天皇制ファシズムへと進んだ。37（昭和12）年7月7日の北支事変の後、「政府の声明」が国民に発令された。

これに対し、日本基督教聯盟では1937年7月22日、「北支事変に関する基督教聯盟の宣言」を出した。この宣言を出す前に文部省では基督教諸教会代表者の会合を開き、時局に対する懇談をし以下の宣言を横浜基督教聯盟を通して諸教会に伝えた。「国民精神ノ作興ヲ図ルニ方リ、我等基督者ノ責任軽カラザルヲ思ヒ一層ノ努力ヲ為シ」として、戦争に協力していった。

横浜基督教聯盟では、1939年1月指路教会において非常時新年信徒大会を開いた。笹倉彌吉は非常時特別伝道応援のため、1939年5月19日から21日までの3日間、海岸教会の礼拝と重なるため依頼をし、池袋教会へ出張することとなった。1939年7月2日、礼拝後定期小会が行われ、横浜基督教聯盟総会において笹倉が理事長に選ばれたとの報告があり承認された。

1941年12月には太平洋戦争が開始されると、日本の教会の中にも戦地に赴いた青年がいた。彼らが、若くして戦死、帰還後健康を害し亡くなったりした事実がある。そうした教会員の若者がどのような思いをもって戦ったのかの足跡を辿ることは重要だが、当該の記録を海岸教会の資料に見出すことはできない。そこで、当時の青年たちが非常時にあたり、どのような思いを抱いていたかの

一端を青年会の機関紙から見てみたい。1940年7月、「[海岸SS新聞]No.53、「ロゴスの友」No.31「本誌廃刊に就いて」と題し海岸教会の青年会員である渡辺博が書いている。次に引用する。

「本紙も最近はややく用紙不足を朔へて参りましたため、近く自発的に廃刊して我国策より同主旨の通達に接しましたので、再び機を得る迄と、本号限り廃刊することに致しました。(中略)私としましては永年労苦を共にして来た二紙と別れることは淋しいことであり、又、教会に対する小さな仕事の一部を失うことにもなるのでありますが、感謝すべきことには、教会という所は、働くべきことは私共にいくらかでも備えられております。この埋め合わせは、「日曜学校」と、又新しく誕生した愛する「薔薇会」とを通して、別の形に於て、為せて頂きたいと願っております」

1940年1月の教会総会において笹倉彌吉の辞任が承認され、同年3月17日渡辺連平の招聘が決議され、笹倉を海岸教会の名誉牧師に推挙した。

#### 第IV篇 日本基督教団時代～日本基督海岸教会時代 (1941年—1959年)

##### 日本基督教団離脱から日本基督教会

日本基督教会から日本基督教団、そして新たに組織された日本基督教会に加入するまでの動きを考察することにする。横浜海岸教会は教会の神学的立ち位置に真剣に対応した様子を見ることができる。1941年4月22日、日本基督教会は教団合同の賛否を問うために第54回臨時大会を富士見町教会において開催した。合同賛成53票、合同反対28票、海岸教会は反対に票を投じたが、教団の加入が決まった。反対の理由は、「日本基督教団の気弱性」にあったとしている。具体的には、①信仰的立場の不一致、②み言葉への不従順、③神第一主義の不徹底、④時代精神との迎合、⑤教派合同の美名に引きずられたことなどを挙げている。

1947年10月5日、横浜海岸教会は教団離脱の方針を打ち出した。同年11月2日渡辺連平、当教会は長老主義教会に復帰すべきであると勧告。48年10月31日日本基督教団からの離脱を決議、4長老及び教会総代が辞任、大きな痛手を受けた。1949年6月5日定期長老執事会で「日本キリスト改革

派」に加入することを決めた。しかし、現状のまま静観、単立教会のまゝ伝道することになった。1951年1月28日日本基督改革派教会東部中会に加入を決議、同年4月加入願を提出。1952年7月27日の臨時総会で改革派教会からの脱退を決議。さらに日本基督長老会への合流も考えられたが加入しなかった。このように横浜海岸教会は、紆余曲折を経て、1959年1月11日の定期小会において再度日本基督教会への加入を確認、同年3月10日に加入することになった。

##### 終りにあたり

横浜海岸教会は、日本人による最初のプロテスタント教会として出発した。この教会から多くの教職者を輩出し、またこの教会の影響を受けて教会が誕生した。1872年3月に日本基督公会が誕生した後、公会運動が展開されたが破綻した。その支会は次の通りである。

	教会名	創立年月日
1	横浜日本基督公会 日本基督一致教会へ	1872年3月10日
2	東京日本基督公会 日本基督一致教会へ	1873年9月20日
3	神戸日本基督公会 組合教会へ	1874年4月19日
4	大阪日本基督公会 組合教会へ	1874年5月24日
5	三田公会 組合教会へ	1875年7月27日
6	弘前日本基督公会 メソジスト教会へ	1875年10月3日
7	兵庫公会 組合教会へ	1876年8月6日
8	上田基督公会 組合教会へ	1876年10月8日
9	京都第一公会 組合教会へ	1876年11月16日
10	京都第二公会 組合教会へ	1876年12月3日
11	京都第三公会 組合教会へ	1876年12月10日
12	長崎基督公会 日本基督一致教会へ	1876年12月23日
13	浪花公会 日本基督一致教会へ	1877年1月1日

横浜海岸教会から誕生した教会には、上記の他

に麴町教会、三島教会、横須賀教会、阿久和教会、和戸教会、金目教会、鎌倉教会(鎌倉雪ノ下教会)等の教会を生み、さらに海岸教会から出た伝道者が新たな教会を生み出したのを見ることができる。1886(明治19)年から始まった日本基督一致教会と日本組合基督教会との合同運動は成就しなかった。そうした中であって、日本基督一致教会は、信仰告白を制定し憲法・規則を改正し、名称を日本基督教会に変更した。1890年の信仰告白は簡潔で単純であるべきで、礼拝で告白できる使徒信条に前文を付したものであった。伝道面で特徴的に表れたのは、エキュメニカルな伝道だった。その一つが大挙伝道であり、全国協同伝道であった。さらに御大典伝道のように事あるごとに特別伝道を展開、それも集中的に継続的に伝道を展開した点に特徴があった。信仰の自由が全面的に認められた現代と相違して、大日本帝国憲法下においては、憲法の許す範囲において信仰の自由を有すという限定的な自由の中で、キリスト教を伸ばすには連帯して伝道に当たるという考え方が優先した。横浜海岸教会は、先頭に立つ教会の一つとしてリーダーシップを発揮していった。

しかし、1937(昭和12)年7月7日北支事変以後、日本のキリスト教が圧迫される中で、ついに日本基督教団にまとめられて、戦争に協力させられる方向へと進んだ。戦後の横浜海岸教会は、新たな教会形成を求めて進んだ。今回研究発表した内容は、小生が『150年史』を執筆した所を中心に叙述させてもらった。『横浜海岸教会150年史』は、2022年7月15日に出版された。同月24日、礼拝後『150年史』の出版を祝う会があった。その後、『150年史』に関係して修養会が持った。

なお、明治学院大学教養教育センター教授の渡辺祐子氏が、『横浜海岸教会150年史』を『キリスト教史学』第77集(2023年7月)に紹介した文章があるので、参考までに読んでほしい。

### 主な参考文献

『横浜海岸教会150年史』、『海岸教会創立五十年略史』、『横浜海岸教会百年の歩み』、『海岸教会人名簿第一号』、『海岸教会人名簿第二号』、『総会記録』、『海岸教会婦人会記録』、『日本基督教会小会記録』、『日本基督一致教会東京中会記録』、同大会記録、

『日本基督教会東京中会記録』、同大会記録、山本秀煌『日本基督教会史』、隅谷三喜男『日本の歴史』、『福音新報』、『植村正久と其の時代』、黒川知文「神の国運動」『日本史におけるキリスト教宣教一宣教活動と人物を中心に一』

拙稿「日本における長老教会の形成」『キリスト教史学』56集、2002年、「明治前期における合同運動の一考察」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』2021年

拙稿『横浜指路教会百二十五年史』通史篇129頁～130頁。拙稿「プリマス・プレズレンの渡来とその波紋」『日本歴史』383号、1980年 他

## 松下孝さんを偲ぶ

岡部 一興



何から松下孝さんの思い出を語ったらよいか迷うのですが、横浜指路教会の機関誌である「指路」誌に「信仰の歩み」ということで、松下さんにインタビューして、記事にしました。今から5年前のことです。その時、松下さんにインタビューして記事にしたいと言ったところ、「私は遠慮したい」という答えが返ってきました。そうですか、残念ですね。といて引き下がりました。それでは、何時ものように松下さんのお宅にお邪魔して、孝さんと話をし、色々なことを聞き出そうと思って、紅葉坂のお宅を訪れました。2度ほど連続して訪ねました。そして、それをまとめ、「信仰の歩み」として掲載しました。そうしましたら、大変喜んで下さいました。

その頃の松下さんは、腰が痛く礼拝に出席することができなくなって来ました。朝は、パンを焼き、息子さんが買って来たコーヒー牛乳を飲み、昼は既成のおかゆ等をレンジで温めて食べ、夜は、奥様の志津子さんと出掛けて野毛で弁当を購入して食べると言った生活をしていました。毎月1回、

長女の和子さんが静岡から来て料理をしてくれるのだと言っていました。松下さんは、朝6時に起きて、2018年に発行された日本聖書協会の『聖書共同訳聖書』を大きな声で読みます。この聖書の訳が分かりやすく好きだと言っていました。その聖書を読み出すと、奥様が起きてきて、聞いていて、終わって祈ることにしていると言っていました。そうした、細かな生活の一コマを話して下さいました。

松下さんのことで思い出すことは、教会での働きです。1970年執事、1981年から14年間長老をされました。長老としての務めは、礼拝部長、讃美歌委員会の委員長、聖歌隊の隊長などをし、1990年に教会堂の大改修がありました頃は、財務に関わり、教会のために誠心誠意奉仕しました。当時は長老の定年はありませんでしたが、70歳になるのを契機に長老の務めを辞めました。体力や思考力など長老の働きを考えた時、何時までも長老をしてはいけないという考えを持っていました。そのことが契機となって、長老の定年が70歳になりました。現在は75歳になっています。また横浜指路教会編纂委員会の委員としての働きでは、「指路教会からみた日本讃美歌史」を書いています。聖歌隊に長い間関わってしまして、この讃美歌はどのようにして生まれたか、讃美歌の作詞作曲は誰かなど細かく書いてはプリントにして、聖歌隊員に配っていました。そのような原稿をもとに58頁わたる論文を書いて下さったのです。それは「横浜指路教会125年史」の資料編に載っています。その内容は、指路教会でどのように讃美歌が歌われて来たか、1874年に出版された初代仮牧師のヘンリー・ルーミスの『教のうた』から始まって、2000年にパイプオルガンが設置されるまでの経緯を実に克明に叙述しました。また、指路教会において、毎月第3土曜日に横浜プロテスタント史研究会という研究会をしてしまして、会の準備をして下さいました。松下さんは、1981年の創立期からの会員で役員をして下さって、リードして下さいました。発表も何度かしています。讃美歌の関係では、「明治初期讃美歌と横浜」の題で研究発表をしています。

最後になりますが、昨年8月はじめだったと思

いますが、松下さんと連絡が取れなかったので、紅葉坂の自宅に伺いました。幾らブザーを鳴らしても返事がありません。そこで、書置きをして郵便受けに入れて帰りました。そうしましたら長女の川村さんから連絡がありまして、神奈川区の「羽沢の家」に7月18日に入所したとお聞きしました。そこで、井上巖さんと9月20日に訪れました。そうしたところ、前日に入院したとのこと、奥様とお会いし話をして帰りました。血液中のナトリウムが低下して、受け答えの反応が悪くなったということでした。ナトリウムは人間にとって重要なミネラルだそうです。また、井上さんと伺おうと思っていた矢先に、逝去の知らせを頂きました。残念でなりません。松下さんは、今は、天に上り主イエスのもとで安らかな眠りにについている事と思います。松下さんは全力で主の業に励んだ方でありました。真面目にコツコツと努力する方であり、教会を愛していました。私も松下さんの信仰にならいたいと思います。ご家族、お一人お一人の上に主の慰めと恵みがありますようにお祈り申し上げます。ありがとうございました。（※2024年1月9日、横浜指路教会において葬式が行われた際に、「思い出」を語ったものに手を加えました。）

### 【編集後記】

今号は、相互に内容が関連する。横浜海岸教会のバラの伝道で生まれた阿久和教会もその一つ。記録にはあるが伝説的な幻の教会であった。鶴見のうなぎ屋「宮川」のご主人市橋千里氏が農村の記録資料の中から発見、片子澤千代松氏が1960年「キリスト教史学」10号に紹介している。

クライストチャーチは外国人墓地近くの山手聖公会で、その歴史は幕末明治期には英国政府、第二次大戦後は、GHQ、そして日本政府との関係の中で歩んできた。

松下氏を偲ぶ。草創期からの会員でした。

この会報のバックナンバーを整理した。60号代で号数に若干の混乱があるが、本会ホームページで、詳細に整理されている。

研究会役員 岡部一興（代表）、熊田凡子、近藤喜重郎、園木幸夫、中島耕二、中村早苗（会計）、花鳥光男（会報）